「京大教養部報」*No. 19*　昭和 *43 (1968)* 年 *10* 月 *25* 日。

中露教室だより

山口は植野教授と同じく言語学の出身である。専門は文体論で、大学院在学中から古代ロシア語諸年代記の文体論的研究をその課題としているが、共時と通時を統合しつつ古代ロシア語の表現手段の有する表現性を考察することに重点を置き、その一つの段階として文法的範疇を個別的に再検討しつつある。

またこれを支えるものとしての言語理論に関しては、特にチェコのプラーグを中心とする機能主義的言語学に興味を抱いているが、ヴント、ポテブニャなどの心理学派にも心を惹かれるものがある。しかし、学問の傾向としては、Neo-Humboldtian とでも称すべきものに属しているとひそかに考えている。

具体的な方法については伝統的な文献学的な方法を旨としている。

「京大教養部報」*No. 22*　昭和 *44 (1969)* 年 *10* 月 *30* 日。

外国語の学び方 — ロシア語

正直いってロシア語といっても他の語学の学習と本質的に異なるところはない。これは、言語というものが本来人間の精神活動の所産であるということに根ざしている。例として疑問文をとってみれば、ロシア語の疑問文なるものは特有の音調を有しており、さまざまのタイプに分たれる。これを「学問的」に分析すると複雑怪奇、とても実用に耐えるものではない。しかし、もし我々が「疑惑の念」をもって文を発すればどうであろうか。少々音調がでたらめでも、多くの場合疑問文と受けとってくれる。大切なのはこの「疑惑の念」であって、英語などで文末を上げたりするのも、これをより効果的に表現する約束にすぎぬと考えられる。

さてロシア語が英語と違うところは、主としてその強い情緒性にあると思われ